

## 北タイにおける5民族の耐久消費財普及 から見た民族格差

益本仁雄, 笠井直美, 大澤清二, 國土将平\*

(大妻女子大学人間生活科学研究科, \* 鳥取大学教育学部)

平成8年7月29日受理

Disparity of the Level of Living among Five Ethnic Groups in Northern Thailand  
through Diffusion of the Durable Consumer Goods

Kimio MASUMOTO, Naomi KASAI, Seiji OHSAWA and Shohei KOKUDO\*

*Institute of Human Living Sciences, Otsuma Women's University, Chiyoda-ku, Tokyo 102*

*\* Faculty of Education, Tottori University, Tottori 680*

In November 1994, the authors surveyed the diffusion of durable consumer goods, together with parental occupations, for 1,835 pupils in northern Thailand.

A remarkable disparity in the level of living was recognized between the plain land peoples (Thai and Han) and the hill tribes (Karen, Hmong and Lisu). The Han have obvious economical advantages. Consumer life of the Thai is fairly high and follows that of the Han. Meanwhile, the hill tribes are compelled to live in poverty, which is far lower than of the above two. Bipolarization is observed in each tribe in the amount of monetary conversion of durable consumer goods per household.

Father's occupations of the plain land peoples are ranked among relatively high income sectors. Those of the hill tribes are concentrated in agriculture. One-fourth of mother's occupations of the plain land peoples occupies the housewives' and "the unemployed," since most of the hill tribe mothers are compelled to work for household expenses.

(Received July 29, 1996)

**Keywords:** durable consumer goods 耐久消費財, plain land people 平地民, hill tribe 山地民, northern Thailand 北タイ, disparity 格差, level of living 生活水準.

### 1. はじめに

タイ王国は、ASEAN にあって高い経済成長を継続している国として、また最近ではインドシナ半島の経済復興拠点として脚光を浴びている。タイ経済の推移を実質 GDP 成長率でみると、1980年代後半の前年比10%を超える高度経済成長期を過ぎてからも、8%前後の高い水準での安定成長が継続しており、1992年にはGDPで1,104.29億ドル(1人あたり1,912ドル)の水準に達し、発展途上国から新興経済国家への道を力強く歩んでいる(財世界経済情報サービス(ワイス)1995;財矢野恒太記念会1995a)。しかしその内部には、地域間、階層間、産業部門間に大きな格差がある。首都バンコクと地方との経済的な格差は激しく、少数の高所得者と大多数の低所得者の存在がみられる。

工業化の進展にもかかわらず依然国民の半数が農業に従事している。これらの格差は深刻な社会問題が生じる原因となっている(石井1975;バンコク日本人商工会議所1993)。極めて貧しい少数民族の存在や、ミャンマーやラオスなど周辺諸国から流入する難民など民族問題が絡み、問題の解決をいっそう難しくしている。こうした状況下で、格差是正をはかるための社会・経済政策が要請されているが、問題解決のための政策立案に不可欠の基礎的社会統計が整備されていないことがしばしば指摘されている(Ohsawa 1989, 1990;大澤等1990)。とりわけ、少数民族に関する公式統計は皆無に等しく、あってもきわめて部分的で散発的である。

筆者らは、ODA や NGO の援助に欠かすことので

きない経済、教育、医療等、現地の生活に関連した客観的データの必要性を痛感し、1980年初頭から現地においてフィールド調査をおこなってきた(大澤等1990; Ohsawa *et al.* 1993, 1994; Society of Health Statistics in South East Asia 1989, 1990). 本論文では、ますます拡大しつつある都市と農村、平地民と山地民の生活水準の格差を析出することを目的として、これまでに知られていなかった北タイにおける民族別の統計調査を1994年11月に実施し、平地民<sup>1)</sup>(タイ族、漢族)と山地民<sup>2)</sup>(カレン族、モン(メオ)族、リス族)の生活水準の格差を耐久消費財の普及実態を通して分析・検討した。なお、これまでに報告された研究は、Walker (1992)、楊等 (1992) 等に見られるように、主として少数民族の習俗に関するものであって本研究のように現地で生活に関する統計情報を大量に収集し、分析した取組みは先例がない。

## 2. 調査環境

筆者らが調査したチェンマイ県は、タイ北部の中心的地域で、バンコクから約700kmの距離にあり、面積は20,107km<sup>2</sup>で岩手県の約1.3倍の広さ、人口は約153万人で長崎県とほぼ同程度である(Alpha Research Co., Ltd. 1994; 財)矢野恒太記念会1995b)。県の中心はチェンマイ市で、人口はおよそ17万人(1993年末)、1296年にメンラーイ王が建設した古都である。住民の約80%がタイ族で、残りの20%が漢族、カレン族、モン族、ラフ族、アカ族、ヤオ族、リス族など、比較的最近になって他の地域から移住したいわゆる少数民族である。このうち漢族は、タイの経済に強い影響力をもち、タイ族と融合しながら平地に居住する。漢族を除いた諸民族が、狭い意味での少数民族、あるいは山岳民族、山地民などと呼ばれている(石井と吉川1993)。同県のおもな産業を付加価値額ウエートで見ると、サービス業26.4%、商業13.0%、農業12.3%、工業9.4%、建設9.1%、金融保険9.0%、などであるが、就業者数からみると約80%が農業に従事している(Alpha Research Manager Infor-

mation Services 1995)。

## 3. 調査の方法

調査時期は、1994年11月中旬で、調査事項は、氏名、居住区、世帯人員数、両親の職業と出稼ぎ状況、学童が将来希望する職業、時計の保有状況と生活時間、飲料水の種類、伝統行事への参加、医療環境、移住してきた時期と将来居住したい地域、耐久消費財の普及状況などである。本論文の主題は、主として家庭における耐久消費財の普及率調査とその分析・検討であるが、直接家庭への調査を実施せずに、学校の児童・生徒に対するアンケート調査という方法をとった。その理由は、少数民族の極めて低い識字率、社会調査に対する低い理解度などの他に、少数民族特有の問題点が存在している。かれらは、この地によく定住を始めたばかりであり、居住している土地は国有地の山林で、家屋と呼ぶにはあまりにも粗末な竹で作られている家に住んでいる。焼畑などによる自給自足的な農業と、不定期な賃労働によって家計を賄っているが、それらを明確に把握することは難しく、彼ら自身も把握する習慣が全くない。貨幣経済が不完全で、先進国の統計概念、定義では計測不可能なこの地域で生活水準をとらえるために、耐久消費財の保有状況と、補完的に両親の職業を調査し、生活水準を推定することとした。

実際には、東南アジア保健統計研究会(日・タイ共同研究プロジェクト)から、現地で活動する日本のNGOであるニコニコボランティア基金(現地の学童に教育機会を与えるために筆者の1人が1989年に設立した、タイ王国文部省認可の財団)を通じて、現地の教育委員会に依頼し、その全面的な協力を得て調査地区と学校を選出した。この際、各民族の代表性、居住地の地域性や人口、交通状況および調査に対する環境を十分考慮した。そこで平地地区(主としてタイ族、および漢族が居住する)の調査対象として、チェンマイ市内の2校およびサモエン郡の2校、また少数民族が多く居住する山間地区のそれとして7村7校で調査を実施した(図1、表1参照)。選出された学校は、タイ族・漢族が多数を占める学校4校、カレン族が多数の学校が1校、モン族の3校、リス族の2校、およびカレン族とリス族が混合している学校が1校であり、合計1,835票、回収率100%であったが、有効回答数は1,797票(97.9%)であった。

今回の調査は、児童・生徒の生活実態と健康調査の

<sup>1)</sup> これらタイ族・漢族は、おもに平地(調査対象の地域では、チェンマイやサモエンの盆地)、および隣接する比較的平坦な地区に居住しているので、平地民(コン・ムアン=町のひと)と呼ばれている。

<sup>2)</sup> カレン族、モン族、リス族は、タイ族よりはるかに遅れて中国、ラオス、ビルマなどから渡来し、タイ族がいない山間部や山地に居住しているため山地民(チャーオ・カオ=山の民)と呼ばれている。

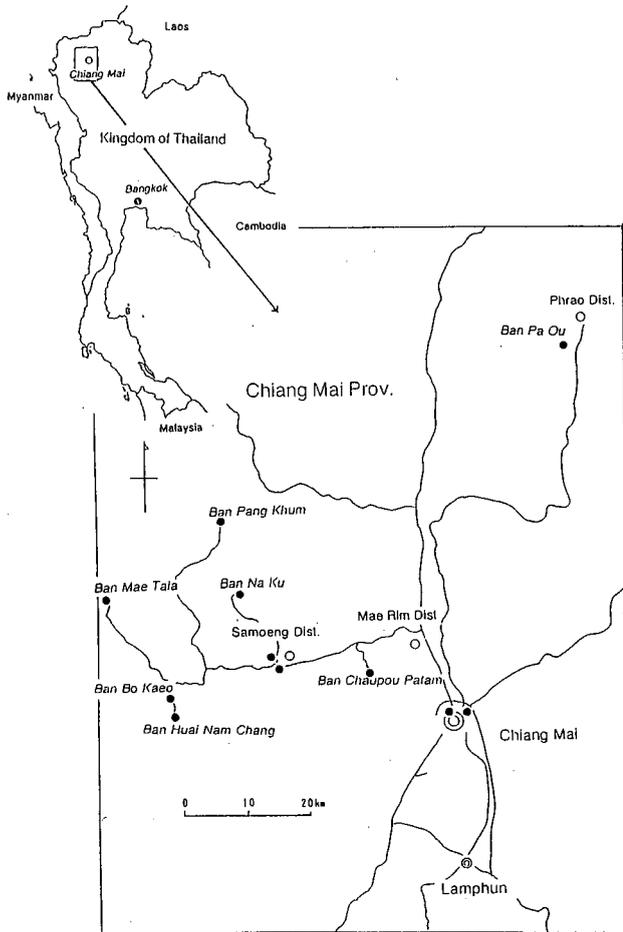


図1. フィールド調査地域

一環として行い、対象校の全学童を対象とした。基本的には1標本1世帯となるよう配慮しているが、北タイの家族構成の実情から、同一世帯の兄弟姉妹であっても名字が異なる場合がかなりあり(益本1995)、名字で家族を識別することが難しい実態がある。兄弟姉妹による世帯の重なりはきわめて少数ではあるが、あることをあらかじめ了解願いたい。

#### 4. 調査結果の分析

児童・生徒の家庭が保有する耐久消費財の普及実態と、親の職業の調査結果に関し、その意味について、筆者らの現地での観察調査結果と文献研究を総合検討して、5民族の財普及上の特徴、および民族間の生活水準比較を論述する。

##### (1) 民族別財普及上の特徴と生活水準比較

###### 1) タイ族

タイ王国の主要な民族であるタイ族は、長江以南の地域を起源とし、漢民族の圧迫で次第に西方あるいは南方に河谷平野に沿って移動し、13世紀頃に北タイ

や中部タイで国家を形成した。言語学的には Thai-Kadai 語群に属し、稲作を生業としている民族とされる(綾部1971; 石井1975; 田中1988; 北原1989; チット1992; Sayamnda 1993)。

タイ族の1世帯あたり耐久消費財保有品目数(表2参照)は15品目以上にのぼり、漢族について高い。民族間の平均値の差の検定を試みると、他の4族に対していずれも有意差が認められる。

食生活・衣生活・住生活・余暇・情報・移動の関連財群別に見ると(表3参照)、タイ族は6財群すべてにおいて保有品目数が漢族に次いで2位である。高普及率(100~66.7%)を示す品目数は、調査対象の27品目中12品目である(表4参照)。食生活関連では4品目、住生活・余暇・移動関連の3群では各2品目、衣生活・情報関連ではそれぞれ1品目である。移動関連のバイク、自転車は、仕事、あるいは通学のためには、この地域において必須の消費財である。余暇関連のラジオ・ラジカセおよびテレビも日常生活に欠かせない財であるために高普及率になっている(伊藤1984; 益本1995)。低普及(33.3~0%)の財は、衣生活関連の機織り機、住生活関連のエアコン、余暇関連のオーディオセット、情報関連の携帯電話、コンピューターおよびファックスである。これらの内、機織り機はタイ族においても、既製の普及に伴い減少していく財であろう。携帯電話、コンピューターの2品目は、都市のタイ族では、今後普及率が高まると考えられるが、タイ族は農村部にも多く居住しており、これらの品目の職業上の必要性も漢族より低いので限界普及率(普及率の上限)はそれほど高くないと予想される。

財保有額の分布(図2参照: 1世帯が保有している財にそれぞれの市場価格を掛けた金額合計の民族別分布を示す)では、各民族とも2層、すなわちI層(275,000~500,000パーツ: 保有している財の金額合計が高い、比較的富裕な層)とII層(0~174,999パーツ: 保有している財の金額合計が低い、比較的貧困な層)に分離した2峰性の分布構造であることがわかる。タイ族では、375,000~399,999パーツに高いピークと、50,000~74,999パーツに低い方のピークが見られるが、これらは次に述べる漢族よりおよそ50,000パーツ低い水準である。なお、おもに自動車の高普及率を反映してI層の世帯数が多くなっていることがわかった。

父親の職業(表5参照)では、農業関連、役人、教

表 1. 調査地区と対象校

調査地区	地区の特徴	学校名	標本数
チェンマイ市	海拔約 310 m	ナワミン中・高等学校	591
	人口約 17 万人 民族：タイ族, 漢族	アヌバンチェンマイ幼稚園・小学校	408
サモエン郡			
中心集落アンパー・サモエン	チェンマイ市から約 55 km	サモエンピッタヤコム中・高等学校	370
	海拔約 490 m 人口約 5,200 人/世帯数 1,302 民族：タイ族, 一部少数民族	バンドンタ小学校	115
ボッケオ村	アンパー・サモエンから約 35 km 海拔約 1,100 m 人口 618 人/世帯数 137 民族：カレン族	バーン・ボッケオ小学校	123
ホウェイナムチャーン村	アンパー・サモエンから約 56 km 海拔約 1,350 m 人口 408 人/世帯数 65 民族：モン族	バーン・ホウェイナムチャーン小学校	20
クム・メータラ村	アンパー・サモエンから約 56 km 海拔約 1,200 m 人口 231 人/世帯数 19 民族：モン族	バーン・クム・メータラ小学校	43
パーンタクム村	アンパー・サモエンから約 57 km 海拔約 1,350 m 人口 624 人/世帯数 115 民族：リス族	バーン・パーンタクム小学校	52
ナークー村	アンパー・サモエンから約 40 km 海拔約 750 m 人口 333 人/世帯数 61 民族：カレン族, リス族	バーン・ナークー小学校	17
メーリム郡			
チャウポーウパタム村	チェンマイ市から約 50 km 海拔約 1,300 m 人口 673 人/世帯数 147 民族：モン族	バーン・チャウポーウパタム小学校	76
パーオ郡			
パオー村	チェンマイ市から約 90 km 海拔約 400 m 人口 345 人/世帯数 62 民族：リス族	バーン・パオー小学校	20

員、職人・工員等などが上位を占めている。これらはタイでは一般的な職業であり、想定される収入も平均的なものが予想される。このことが、自営業等が多い漢族に比べてタイ族の収入が相対的に低いことに関連

していよう。なお、母親の職業（同）は、稲作を中心とした農業関連が 21.6% で他の職種の 2 倍以上になっている。また、専業主婦と無職の合計は 28.1% にのぼっているのも特徴的である。

表2. 民族別1世帯あたり耐久消費財保有品目数

	平均値±標準偏差	標本数	平均値の差の検定				
			タイ	漢	カレン	モン	リス
タイ	15.261±5.217	1,257	—	*	*	*	*
漢	18.140±5.336	85	*	—	*	*	*
カレン	4.941±3.916	230	*	*	—	*	n.s.
モン	6.177±3.560	175	*	*	*	—	n.s.
リス	5.360±3.250	50	*	*	n.s.	n.s.	—

\* $p < 0.01$ .

## 2) 漢族

漢族は、タイの全人口の約12%、600万人に達し、少数民族のなかでは最も多数を占めている。いわゆる華僑とその子孫であり、タイにおいて商業、工業、金融業、貿易などのほとんどを掌握し経済に大きな影響力をもっている。他方、タイ国民への同化が進んでいるのもこの民族の特徴である（田中1988；石井と吉川1993）。

漢族は5民族中もっとも多くの耐久消費財を保有し、1世帯あたり平均18品目以上にのぼり、平均値の差の検定結果からも、他の4族に対して有意に高い保有数を示す。

衣・食・住・余暇・情報・移動の6財群中すべてにおいても保有品目数は1位を占めて、また27品目中19品目が高普及で、すべての財群について2品目以上の財が高普及になっている。漢族が最も富裕な民族であることはあらかじめ予想されていたところであるが、チェンマイ地域でも耐久消費財の普及がきわめて高いことがわかった。低普及の財は、衣生活関連の機織り機、余暇関連のオーディオセット、情報関連の携帯電話、コンピューター、およびファックスのみである。これらのうち、機織り機については、現在自家消費や生業（現金収入）のために機織りを行っていないので、普及率は今後も減少こそすれ増加するとは考えにくい。携帯電話、コンピューター、ファックスなどは、おもに都市で生活をし、商売・営業を生業としている漢族では、今後も普及が高まっていくと思われる。七輪とガスコンロ、扇風機とエアコン、自転車とバイクなどが代替関係にありながらそれぞれ普及率が高いのは、所得が高価格の耐久消費財を購入できるレベルを超えると、財の関係自体が補完関係に転じること、それによって漢族が便益性の高い都市的生活をしていることを物語っている。

財保有額分布では、400,000~424,999パーツに高いピークがあり、50,000~74,999パーツに低いピークがある。この分布は、漢族が5族中で最も高いことを示しているが、漢族でも、多くの「富裕層」とわずかの「貧困層」とに2分されていることがわかる。

父親の職業は、タイ族と異なり、商店主、役人、経営者・管理職など比較的高収入の職業が上位を占め、比較的低収入の農業関連（稲作・畑作・野菜栽培等）はわずかに6.1%に過ぎない。一方、母親の職業では、商店主が26.2%と高率で、農業関連は7.2%に過ぎず、タイ族と異なった就労状況を示している。なお、無職と専業主婦の合計は23.8%で、タイ族より4.3ポイント低い。

## 3) カレン族

カレン族は、言語学的にはSino-Tibetan語族に類別され、他の山地民に比べると比較的標高の低い（海拔500m前後）山間部に居住し、生業は低地では水稲、山地では焼畑耕作による陸稲をおもに栽培している。タイにおける山地民のなかで人口が最も多く、全体では約32万人（1995年）がタイ北部のミャンマーとの国境沿いの地域に分布している（岩田1971；飯島1973；National Statistical Office 1986；Nawigamune 1992；Tribal Research Institute 1995）。

1世帯あたり平均の耐久消費財保有数は5品目弱で、5民族のなかで最低である。平均値の差の検定では、平地民とモン族に対して有意に低いことがみとめられた。

カレン族では、高普及の耐久消費財は1品目も見られなかった。中普及（33.4~66.6%）の財も、衣生活・住生活・移動関連の財群では全く見られず、わずかに食生活関連財の七輪、余暇関連財のラジオ・ラジカセ、およびテレビ、情報関連財の時計があがっただけで、その他の財はすべて低普及であった。しかしその中で、

表3. 民族別耐久消費財普及率 (%)・市場価格 (パーツ)

品 目	民族					全体	参考市場価格*
	平地民		山地民				
	タイ	漢	カレン	モン	リス		
<b>食生活関連財</b>							
冷蔵庫	83.7	90.6	14.3	9.1	18.0	71.7	5,500
電気炊飯器	80.6	90.6	23.9	18.3	10.0	70.5	850
七輪	71.8	74.1	60.0	52.0	90.0	69.8	27.5
ガスコンロ	77.5	91.8	16.1	20.6	6.0	67.5	1,050
1世帯あたり平均保有品目数	3.14	3.47	1.14	1.00	1.24		
<b>衣生活関連財</b>							
たんす	88.9	89.4	33.0	33.7	18.0	79.0	3,250
ミシン	47.3	56.5	13.0	49.7	40.0	44.6	9,400
電気洗濯機	47.7	70.6	2.2	2.3	6.0	40.6	5,750
機織り機	7.3	8.2	23.0	18.3	44.0	10.1	4,500
1世帯あたり平均保有品目数	1.91	2.25	0.71	1.04	1.08		
<b>住生活関連財</b>							
扇風機	90.4	87.1	14.3	15.4	18.0	77.3	850
勉強机	77.4	89.4	27.0	33.7	10.0	69.2	1,750
水洗トイレ	59.2	71.8	29.1	18.3	24.0	53.6	450
エアコン	15.6	51.8	1.3	1.1	2.0	14.3	23,500
1世帯あたり平均保有品目数	2.43	3.00	0.72	0.69	0.54		
<b>余暇関連財</b>							
ラジオ・ラジカセ	91.7	95.3	54.3	73.1	58.0	86.7	2,500
テレビ	91.5	94.1	34.8	18.9	30.0	80.7	8,000
カメラ	65.3	74.1	13.9	34.9	8.0	58.0	1,750
ビデオ	49.7	68.2	5.7	10.3	6.0	43.0	6,500
ファミコン	43.0	72.9	1.7	5.7	2.0	37.1	2,250
オーディオセット	14.2	27.1	2.2	6.3	2.0	12.8	10,000
1世帯あたり平均保有品目数	3.55	4.32	1.13	1.49	1.06		
<b>情報関連財</b>							
時計	94.4	96.5	65.2	81.7	78.0	90.8	1,125
電卓	46.5	63.5	3.0	7.4	8.0	40.0	300
電話	44.2	78.8	6.1	4.6	6.0	38.7	7,850
携帯電話	11.9	28.2	0.9	2.3	2.0	10.6	24,000
コンピューター	8.7	20.0	0.4	2.3	4.0	7.8	29,000
ファックス	6.0	11.8	1.3	2.9	0.0	5.4	10,500
1世帯あたり平均保有品目数	2.12	2.99	0.77	1.01	0.98		
<b>移動関連財</b>							
バイク	79.9	85.9	30.0	21.1	20.0	70.7	36,000
自転車	77.4	72.9	19.1	22.3	14.0	67.3	2,750
自動車	55.5	74.1	10.9	51.4	12.0	51.1	292,000
1世帯あたり平均保有品目数	2.13	2.33	0.6	0.95	0.46		
民族別有効標本数	1,257	85	230	175	50	1,797	

\* 参考市場価格は1995年末にチェンマイ地域で調査。

北タイにおける5民族の耐久消費財普及から見た民族格差

表4. 民族別耐久消費財普及水準

		高普及 (100~66.7%)	中普及 (66.6~33.4%)	低普及 (33.3~0%)
食生活関連財	タイ族	冷蔵庫, 電気炊飯器, ガスコンロ, 七輪		
	漢族	ガスコンロ, 冷蔵庫, 電気炊飯器, 七輪		
	カレン族		七輪	電気炊飯器, ガスコンロ, 冷蔵庫
	モン族		七輪	ガスコンロ, 電気炊飯器, 冷蔵庫
	リス族	七輪		冷蔵庫, 電気炊飯器, ガスコンロ
衣生活関連財	タイ族	たんす	電気洗濯機, ミシン	機織り機
	漢族	たんす, 電気洗濯機	ミシン	機織り機
	カレン族			たんす, 機織り機, ミシン, 電気洗濯機
	モン族		ミシン, たんす	機織り機, 電気洗濯機
	リス族		機織り機, ミシン	たんす, 電気洗濯機
住生活関連財	タイ族	扇風機, 勉強机	水洗トイレ	エアコン
	漢族	勉強机, 扇風機, 水洗トイレ	エアコン	
	カレン族			水洗トイレ, 勉強机, 扇風機, エアコン
	モン族		勉強机	水洗トイレ, 扇風機, エアコン
	リス族			水洗トイレ, 扇風機, 勉強机, エアコン
余暇関連財	タイ族	ラジオ・ラジカセ, テレビ	カメラ, ビデオ, ファミコン	オーディオセット
	漢族	ラジオ・ラジカセ, テレビ, カメラ, ファミコン, ビデオ		オーディオセット
	カレン族		ラジオ・ラジカセ, テレビ	カメラ, ビデオ, オーディオセット, ファミコン
	モン族	ラジオ・ラジカセ	カメラ	テレビ, ビデオ, オーディオセット, ファミコン
	リス族		ラジオ・ラジカセ	テレビ, カメラ, ビデオ, オーディオセット, ファミコン
情報関連財	タイ族	時計	電卓, 電話	携帯電話, コンピューター, ファックス
	漢族	時計, 電話	電卓	携帯電話, コンピューター, ファックス
	カレン族		時計	電話, 電卓, ファックス, 携帯電話, コンピューター
	モン族	時計		電卓, 電話, ファックス, 携帯電話, コンピューター
	リス族	時計		電卓, 電話, コンピューター, 携帯電話, ファックス
移動関連財	タイ族	バイク, 自転車	自動車	
	漢族	バイク, 自動車, 自転車		
	カレン族			バイク, 自転車, 自動車
	モン族		自動車	自転車, バイク
	リス族			バイク, 自転車, 自動車

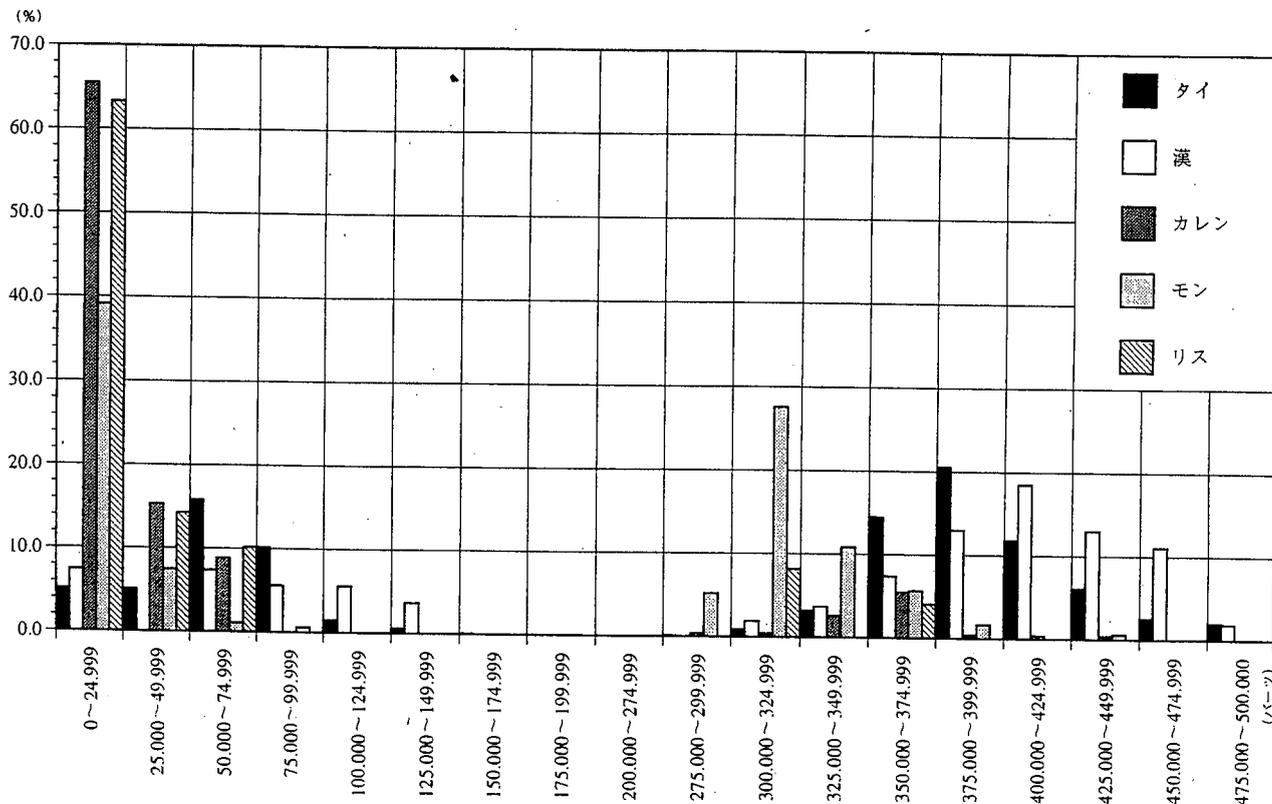


図2. 民族別1世帯あたり財保有額分布

表5. 両親の職業 (%)

	父親					母親				
	タイ	漢	カレン	モン	リス	タイ	漢	カレン	モン	リス
稲作	17.1	2.4	49.1	4.8	4.1	15.3	2.4	35.1	3.7	0.0
畑作	2.9	3.7	30.6	73.1	81.6	3.1	4.8	37.7	74.4	77.6
野菜栽培等	3.1	0.0	7.3	13.2	10.2	3.2	0.0	16.0	12.8	18.4
職人・工員等	8.6	2.4	2.2	0.0	0.0	5.2	3.6	1.3	0.0	0.0
警官	6.5	1.2	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0
事務員	3.3	7.3	5.2	1.2	0.0	2.6	1.2	3.0	0.6	0.0
経営者・管理職	2.7	9.8	0.9	0.0	0.0	1.8	6.0	0.0	0.0	0.0
商店主	7.6	31.7	0.0	1.2	0.0	9.4	26.2	0.0	0.6	0.0
役人	18.3	15.9	0.4	0.6	2.0	9.9	11.9	0.4	0.0	2.0
教員	8.7	6.1	0.4	0.0	0.0	10.5	7.1	0.0	0.0	0.0
専業主婦	—	—	—	—	—	26.3	21.4	3.0	3.0	0.0
無職	1.1	0.0	0.0	0.6	0.0	1.8	2.4	0.4	0.6	0.0
その他	20.1	19.5	3.9	5.3	2.1	10.8	13.0	3.1	4.3	2.0
標本数	1,203	82	232	167	49	1,219	84	231	164	49

テレビだけは比較的高い普及率を示したことが注目される。電界強度が比較的良好の高度の低い地区に彼らが居住していることが一因となっていると思われる。七輪は調査対象の中で最も安価な財で、所得が増せば

ガスコンロに替わると思われる下位代替財である。財保有額分布では、大多数の家庭が最低クラスの0~24,999バーツに集中し、より上位のクラスの出現頻度は著しく減って、74,999バーツ止まりである。比

較的富裕な層は、350,000～374,999 バーツのクラスに小さなピークがあるが、平地民のそれより明らかに低い。筆者らは、カレン族を、人口ばかりでなく経済的にも大きな勢力があると予想していた。しかしながら、耐久消費財の普及率の低さから、カレン族の収入やその蓄積の低さ、そして生活の貧しさがうかがわれた。

父親の職業は、山地民に共通しているが、農業関連に集中している。特にこの族では、他の山地民より稲作の比重が高い。これは、カレン族が比較的低標高あるいはやや平坦な土地に居住していることと関連している。このことは、他の山地民に比して生業に有利に作用し、生活はより豊かになりやすいと考えられるが、実際の結果からすると現金収入の面からしてかならずしも妥当でないことが判明した。この背景には、平地カレン族はタイ族と販売競争などで競合するため、稲作では所得が伸ばせない状況があると考えられる。母親の職業では、農業関連が88.8%に達するが、父親に比べ稲作は低く、畑作および野菜栽培等では高くなっている。畑や野菜作りはおもに母親などの女性に依存していることがわかる。専業主婦と無職の合計は3.4%に過ぎない。

#### 4) モン族

この族は、メオ族とも呼ばれ、中国南部から北部ベトナム、ラオス、タイ、ミャンマーの一部にまで広く分布し、言語学的には Austro-Thai 語族である。タイの山地民ではカレン族について人口が多く、124,000人余りが北タイに居住している。標高1,000～1,200 mに集落を作り、陸稲や他の農作物のほか、かつてはケシの栽培も行ってきた (Nawigamune 1992; Tribal Research Institute 1995)。

1世帯あたり平均の耐久消費財保有数は6品目強で、山地民の中では最も多い。平均値の差の検定からしてみると、平地民より有意に低く、カレン族よりは有意に高い結果であった。

モン族では、高普及の財として2品目、すなわち余暇関連でラジオ・ラジカセが、また情報関連の時計があがっている。中普及の財は6品目で、食生活関連で七輪、衣生活関連ではミシン、たんす、住関連で勉強机、余暇関連でカメラ、移動関連で自動車があがっていることに注目したい。その他の財は、低普及のランクに含まれている。中普及のランクに衣生活関連が2財含まれており、山地民のアイデンティティーの表れの一つである衣服に対する関心の高さをうかがわせ

ている。

財保有額分布では、99,999 バーツ以下に48.3%の世帯が含まれるが、特にきわだった特徴として、他の山地民と同様に最頻値が最貧の24,999 バーツ以下にあることである。他方、275,000 バーツ以上の比較的富裕な世帯が51.7%存在する。このことは、自動車(ほとんどがピックアップと呼ばれる小型トラックである)にモン族の経済生活が深く関連しているためである。同族の居住する地域は山間部で、換金作物のキャベツ栽培に適しているが、それを輸送し、販売するためには自動車が不可欠となる。そのため、多額の借入金をして自動車保有することになる。モン族は、かつては麻薬の原料(ケシ)を栽培して現金収入を得ていた時期があった。現在では国際世論を背景にしたタイ政府の取締りと換金作物への転換奨励で、生花や野菜などの栽培をするようになったことが保有の引き金になったと考えられる。

父親の職業は、農業関連に91.1%と集中しているが、稲作農家は4.8%に過ぎず、これに対し畑作農家は73.1%、野菜栽培等では13.2%となっていて、カレン族とはかなり異なった構成になっている。なお、母親の職業は、畑作や野菜作りを中心とした農業関連が90.9%であった。専業主婦と無職の合計は3.6%である。

#### 5) リス族

この族は、Sino-Tibetan 語族に属し、南中国から約80年前にタイに初めて移住したといわれ、1995年には北部タイに約28,000人が居住している。標高1,000 m前後の山間部に集落を作り、生業は焼畑耕作で、陸稲、野菜などの栽培と家畜の飼育がおもである (Nawigamune 1992; Tribal Research Institute 1995)。

今回の調査の結果では、1世帯あたり平均耐久消費財保有数は5品目強で、これは山地民では2番目の水準にあたる。平均値の差の検定では、リス族は平地民に対して有意に低い。

調査対象の27品目中、食生活関連の七輪、情報関連の時計の2品目が高普及の財であるが、いずれも低価格の生活必需品である。つぎに、衣生活関連の機織り機、ミシン、余暇関連のラジオ・ラジカセが中普及となっている。衣生活関連の機織り機、ミシンが中普及となっていることは、かれらが織布(場合によっては糸を紡ぐ)段階から衣服を自家製作し、あるいは現金収入のための土産品用の衣類の製作を行っていることと関係している。

財所有額分布をみると 24,999 バーツ以下の最下層に集中し、24,999 バーツまでの層に大多数の家庭が含まれ、ごく少数ながら、300,000~324,999 バーツを中心とした層に小さなピークがみられるが、もちろん平地民の水準より有意に低い。

父親の職業をみると、農業関連が約 96% で、そのうち畑作の比重がきわめて高い。母親全員が職業をもち、そのうちの 96% が農業関連で、稲作は皆無となっていることが特徴的である。チェンマイ地域では、農作物の価格はこのところ恒常的に低迷しており、農業に従事していることは家計が貧しいことをも意味している(益本 1995)。さらに、一般的にいて、平地の稲作に比べ山地の畑作は農業生産性が低い。畑作の比重が高いリス族は山地民の中で最も厳しい条件下で生活していることになる。

## (2) 考 察

### 1) 5 民族の耐久消費財普及の背景

この国の中核的民族であるタイ族は、長い間豊かな自然の恵みを受つて農業に従事し、「マイペンライ-気にしない」「サバイ-気楽な」が生活信条であった。かつて、アメリカの人類学者エンブリーは、タイ族社会を評して“loosely structured social system”と評した。しかし最近では、この地域では貨幣経済が浸透し、工業化が進展し、農業の比重が相対的に低下している。人口学的にも、人口の国内移動が都市に集中しつづけ (Institute of Developing Economies 1981)、農業従事者が、より生産性の高い工業やサービス部門の給与所得者に転化したり、農業経営においても少しずつ生産性を重視し始めている。こうした背景のなかで、北タイのタイ族も、遅まきながら財保有分布(図 2 参照)のⅡ層からⅠ層へ転化する兆しがみられ、今後もこの傾向は継続するであろう。それと同時に、タイ族のなかで富める者と貧しい者の二極分化はますます拡大することが考えられる。

漢族は、大半が都市生活者であり、高い学歴や高度の技術を得る機会に恵まれている。たとえ現在においてはⅡ層に属する人々であっても、脈々と祖先から伝えられた商売のノウハウを持っており、「発財(ファーツァイ:金持ちになる)」こそ最高の生活価値観であるとして努力を惜しまない傾向がある。さらに、成功している華僑仲間との結束が固く金銭的にも相互に援助しあい、所得拡大の機会に恵まれているので、いずれはⅠ層に入ることになることが考えられる。事実、彼らの先人は、金融業、精米業、薬種業に秀でており、

政界、官界、財界の指導者、さらにはタイ王室、王族との婚姻関係をもっている者も少なくなく、タイ政治・経済は漢族をなくして成り立たないのが実態である。

これに対し、山地民のおかれている立場は深刻である。生産性を高める土地もほとんど所有せず(居住地区は国有地の山林である)、かつまた交通、通信、医療、教育のすべてにわたって著しく遅滞した不便な条件下に居住している。仮に仕事をしようとしても教育程度が低く、工場労働や組織内での労働に就くだけの技術や資格をもっていない。さらに、タイという国民国家の社会・経済組織の枠外にいるため、タイ族の残余的な労働条件の厳しい低所得の仕事にしかつづことが出来ない。それでも、仕事があれば幸いなくらいで、あった場合でも多数のタイ族の最底層と競争を余儀なくされるのである。山地民がⅡ層からⅠ層にシフトする機会を得ることは困難であり、Ⅱ層から抜け出られないのが実態である。一方、モン族は農産物の売買や移動のために自動車を購入しているため、表面的には 3 民族中最も豊かな印象をあたえている。これは、自動車の保有率と市場価格が高いためであって、他の財の保有率からして未だ低生活水準にあるといえよう。

また、この地域のリス族は山間部の地形や気候を利用して、割のいい換金作物(例えば、ライチーや菊の花のハウス栽培)を行い、現金収入を得始めている。リス族がカレン族より耐久消費財保有において上位になった理由の一つかもしれないが、少数民族の経済的地位向上の新しい動きとして注目し、かつ期待したい。

### 2) 山地民調査の問題点と課題

少数民族が多数居住するこの地域で、統計調査を行う場合の問題は、調査環境が著しく整っていないことである。言語、宗教、文化の違いはもとより、調査地に接近し、調査交渉を行うという初次的な段階で、多くの障害を認める。まして、統計的な調査は現地の役所でも行うのが困難である。このような全般的な問題の他に、直接的には、先に述べた様に、住民の低い識字率<sup>31)</sup>と調査協力が得られにくいこと、貨幣経済化に完全には移行していないため金額に換算して豊かさや生活水準を計数化しえないことなどがある。いずれの問題も先進国の調査とは異なった課題である。そこで

<sup>31)</sup> タイの識字率(1985年調査)は、タイ全体としては 87.7% であるが、少数民族ではきわめて低い。カレン族 44.0%、モン族 13.5%、リス族 18.4% となっている。なお、漢族のデータは不明であるが、教育の熱心さから推定して、100% に近いと思われる。

筆者らは、現地で最も組織力のある教育委員会を経由し、教員の全面的な協力の下に、調査対象に児童・生徒（字が読める）を選ぶことでそれらの困難の多くを回避した。また、生活水準を的確に把えるためには、まず家計収支の調査が望ましいが、実際には金額として把握しえない部分が多いため、次善の策として耐久消費財の保有と両親の職業を調査し、そこから生活水準を推定する方法をとった。

今後の課題としては、このような調査環境の改善の他に、生活水準を把握できるより容易で的確な指標を探することも重要である。さらに、得られた調査結果を政策提案にまとめ、NGOや現地教育委員会、大学を通じて、日本およびタイ王国の関係部門に提供していきたいと考えている。

## 5. 要 約

筆者らが1994年11月に実施した北タイ・チェンマイ県の学童を対象にした家庭の耐久消費財普及調査から、この地域に居住する五つの民族の特徴が次のように明らかになった。

(1) 耐久消費財の普及品目数および有意差検定と各品目の普及率比較から、平地民と山地民との間、および民族間にも有意差があることが析出された。漢族は、この地域における経済的優位性を示し、タイ族の消費生活はそれに次いで高水準であった。一方、山地民のカレン・モン・リスの3族は、平地民の漢・タイ2族とはかけ離れた貧困な生活に甘んじていることが明らかになった。

(2) 一世帯あたり耐久消費財の保有額については、各民族とも2極分化がみられる。なお、平地民では富裕層が多いが、山地民では貧困層が多数を占めていた。

(3) 父親の職業では、平地民は商店主、役人、経営者・管理職など、農業より比較的收入が高く、多様な職業についているのに対し、山地民では、農業関連に集中していた。母親の職業でも、父親のそれと似た傾向にあるが、平地民では、専業主婦や無職が1/4に達するのにに対し、山地民では専業主婦や無職は皆無か極めてわずかであり、女性も生産労働に参加していた。

調査研究では、タイ王国チェンマイ県サモエン郡初等教育長プラシット・ポンタン氏、ニコニコボランティア基金マニト・イムヤム氏に学校選定、現地調査に関して大変お世話になった。また、調査対象となった11校の校長および教員各位、1,835名の児童・生

徒の皆さん、調査協力をいただいた中京大学家田重晴教授、有益な示唆をいただいた大妻女子大学馬場優子教授に深く感謝申し上げる。

## 引 用 文 献

- Alpha Research Co., Ltd. (ed.) (1994) *Pocket Thailand in Figures*, 1st ed., Alpha Research Co., Bangkok, 1-324
- Alpha Research Manager Information Services (ed.) (1995) *Thailand in Figures 1995-1996*, Alpha Research Co., Ltd., Bangkok, 851-856
- 綾部恒雄 (1971) 『タイ族—その社会と文化』, (株) 弘文堂, 東京, 1-354
- バンコク日本人商工会議所 (編) (1993) 『1992~1993年版タイ国経済概況』, バンコク日本人商工会議所, バンコク, 1-494
- チット, P. (1992) 『タイ族の歴史—民族名の起源から—』, (株) 井村文化事業社, 東京, 1-465
- 飯島 茂 (1973) 『祖霊の世界 アジアのひとつの見方』, 日本放送出版協会, 東京, 1-240
- Institute of Developing Economies (ed.) (1981) *I.D.E. Statistical Data Series No. 32 Internal Migration of Thailand*, Institute of Developing Economies, Tokyo, 1-231
- 石井米雄 (編) (1975) 『タイ国—ひとつの稲作社会—』, (株) 創文社, 東京, 1-450
- 石井米雄, 吉川利治 (編) (1993) 『東南アジアを知るシリーズ タイの事典』, (株) 同朋舎出版, 京都, 1-498
- 伊藤章治 (1984) 『現地報告・タイ最底辺—ほんの昨日の日本—』, (株) 勁草書房, 1-253
- 岩田慶治 (1971) 『東南アジアの少数民族』, 日本放送出版協会, 東京, 1-246
- 北原 淳 (編) (1989) 『東南アジアの社会学—家族・農村・都市—』, 世界思想社, 京都, 1-294
- 益本仁雄 (1995) 『市場経済化・情報化にゆれるアンカイ村—北タイの未電化村』, (株) 近代文藝社, 東京, 1-191
- National Statistical Office (1986) *Report Survey of Hill Tribe Population 1986*, Chiang Mai Province Office of the Prime Minister, Kingdom of Thailand, Bangkok, 1-91
- Nawigamune, W. (1992) *Chiang Mai and the Hill Tribes*, Sangdad Publication, Bangkok, 1-123
- Ohsawa, S. (1989) Simple and Robust Health Indicators of the Density of Medical Care for Primary Health Care Purposes, *Asian Med. J.*, **32**, 640-649
- Ohsawa, S. (1990) Study on Reliability of Health Statistics in Southeast Asian Countries, *Bull. Fac. Domest. Sci., Otsuma Women's Univ.*, **26**, 107-120
- 大澤清二, 國土将平, Phanitchareonnam, S. (1990) 北タイにおける地域実態調査の試み, *統計学*, **59**, 44-57
- Ohsawa, S., Kokudo, S., and Sagawa, T. (1993) *Upon Child Motor Development Study*, Techno Japan Ltd., Tokyo, 1-167
- Ohsawa, S., Kokudo, S., Kasai, N., and Sagawa, T. (1994) *Upon Child Health Status Survey*, Techno Japan Ltd., Tokyo, 1-149

- Sayamnda, R. (1993) *A History of Thailand*, Thai Watana Panich Co., Bangkok, 1-208
- (財)世界経済情報サービス (ワイス) (編) (1995) 『ARC レポートタイ』, (財)世界情報サービス (WEIS), 東京, 1-82
- Society of Health Statistics in South East Asia (1989) *Survey of Health and Lifestyles of School Children in Northeast Thailand*, Fuji Technology Press, Tokyo, 1-258
- Society of Health Statistics in South East Asia (1990) *Survey of Health and Lifestyles of School Children in Northeast Thailand*, Fuji Technology Press, Tokyo, 1-129
- 田中忠治 (1988) 『タイー入門』, (株)日中出版, 東京, 1-390
- Tribal Research Institute (1995) *The Hill Tribes of Thailand*, 4th ed., Chiang Mai University Campus, Chiang Mai, 1-84
- Walker, A.R. (ed.) (1992) *The High Land Heritage: Collected Essays on Upland North Thailand*, Singapore, 1-526
- (財)矢野恒太記念会 (1995 a) 『世界国勢図会 '95/96』, (株)国勢社, 東京, 1-526
- (財)矢野恒太記念会 (1995 b) 『日本国勢図会 '95/96』, (株)国勢社, 東京, 1-574
- 楊 知勇, 泰 家華, 李 子賢 (1992) 『雲南少数民族生活習俗誌』, 雲南民族出版社, 昆明, 1-386